



10



短歌・俳句

◇短歌

短歌とは、「五・七・五・七・七」の三十一音の中に感動を詠みこんだ文学作品のこと。短歌の形式や技法を理解したうえで、一語一語吟味し、作者の感動をとらえることが大切である。

短歌を読み味わう際のポイントは、以下のことがらである。

○形式

- ①音数：五・七・五・七・七の五句三十一音からなる。
- ②上の句と下の句：前の三句を上句、あとの二句を下句という。
- ③字余りと字足らず：音数が五・七・五・七・七より多いものを字余りの歌、それより少ないものを字足らずの歌という。
- ④句切れ：短歌の途中で意味が区切れるところ。一句目のあとで区切れれば初句切れ、以下同様に、二句切れ、三句切れ、四句切れといい、途中で区切れないものを句切れなしという。
- ⑤調子：初句切れ、三句切れは七五調、二句切れ、四句切れは五七調になる。

○技法

- ①枕詞：ある特定の言葉に係り、歌の調子を整える。ふつう五音で、特定の意味は持たない。
- ②掛詞：一つの言葉で二つの意味を表し、歌の内容を深める。
- ③縁語：意味のうえで互いに関係のある語を二つ以上詠みこみ、面白みを出す。

◇俳句

- ④体言止め：結句を体言で終わらせて、余情を残す。
- ⑤倒置：言葉の順序を逆にして、印象を強める。
- ⑥比喩：ある物を別の物にとえて表す。直喩、隠喩、擬人法などがある。（「9 詩」参照）
- ⑦反復：ある部分を強調するために、同じ語句を繰り返す。

○形式・きまり

- ①音数：五・七・五の三句十七音からなるのが原則だが、音数にこだわらない自由律俳句というものもある。
- ②季語：一つの俳句の中に季節を表す語（季語）を一つ入れるのが原則。季語がないものを無季、複数あるものを季重なりという。
- ③字余りと字足らず：音数が五・七・五より多いものを字余りの句、それより少ないものを字足らずの句という。
- ④切れ字：意味の切れ目に使われる言葉（「かな・や・けり」など）。作者の感動の中心を示す。
- ⑤句切れ：俳句の途中で意味が区切れる部分。初句切れ、二句切れ、句切れなし、に分けられる。

1 次の短歌を読んで、あとの問いに答えよ。

- A たちねの母がつりたる青蚊帳をすがしといねつたるみたれども
長塚 節
- B おりたちて今朝の寒さを驚きぬ露しと柿の落葉深く
伊藤左千夫
- C 日盛りの道のむかふに華やかに絵日傘売が荷を置きにけり
佐藤佐太郎
- D うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花
若山 牧水
- E 子供等は列をはみ出しわき見をしさざめきやめずひきあられゆく
木下 利玄

問一 次の短歌の鑑賞文である。これを読んで、あとの(1)・(2)に答えよ。

作者は病を得て、老母に蚊帳をつつてもらうのである。老母は、背のびも思うにまかせない。だから、蚊帳はたるんで体に近くさがっている。しかし、その母の慈愛に感謝しながらすがしと言つて身を横たえたのである。

第1句と結句が2になっているが、その結句で、この歌はいちだんと味わいが深まっている。

(1) 1にあてはまる漢数字を書け。

(2) 2にあてはまる表現技法として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 比喩
- イ 倒置
- ウ 対句
- エ 字余り

問二 Bの短歌に「おりたちて」とあるが、どこにおりたつたのか、考えて書け。

問三 次の(1)～(3)の説明にあてはまるものとして最も適当なものをBの短歌から選び、それぞれ記号で答えよ。

- (1) 絵画的で明るい雰囲気のある歌。後半はまさに「主役登場」の感じである。
- (2) いくつかの動作を一気にたたみこみながら、素材をいきいきと描いている。
- (3) 第三句に意味の切れ目をおき、さらに結句を連用形で止め、余韻を残している。

(1) _____

(2) _____

(3) _____

問四 A～Eの短歌について、次の(1)～(4)に答えよ。

(1) 字余りのものを一つ選び、記号で答えよ。

(2) 枕詞が使われているものを一つ選び、記号で答えよ。

(3) 体言止めのものを一つ選び、記号で答えよ。

(4) 四句切れのものを二つ選び、それぞれ記号で答えよ。

2 次の短歌を読んで、あとの問いに答えよ。

- A 花さそふなごりを雲に吹きとめてしばしはにほへ春の山風
藤原雅経
- B 春来ぬと人は言へどもうぐひすの鳴かぬかぎりはあらじとぞ思ふ
壬生忠岑
- C *1 妹が見し庭に花咲き時は経ぬわが泣く涙いまだ干なくに
大伴家持
- D 佐保山にたなびくかすみ見ること妹を思ひ出泣かぬ日はなし
大伴家持

*1 妹 || 妻。
*2 干なくに || 乾かないのに。

問一 Bの短歌に読点を一か所つけるとしたら、一句目から四句目までのどの句のあとがよいか。

問二 — 線部「あらじとぞ思ふ」とあるが、どう思うのか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- A 春が来ないとはい限るまいと思う。
- イ うぐいすが鳴いたのではあるまいと思う。
- ウ 春が来たのではあるまいと思う。
- エ うぐいすが鳴くことはあるまいと思う。

問三 Cの短歌は何句切れか。

問四 A、Dの短歌から体言止めになっているものを一つ選び、記号

で答えよ。

- 問五 CとDの短歌に詠まれている共通の心情として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。
- A 旅さきで妻を案じる心情。
- イ 亡き妻を思い悲しむ心情。
- ウ 妻の苦勞をねぎらう心情。
- エ 老いた妻をいたわる心情。

3 次の俳句を読んで、あとの問いに答えよ。

- A いくたびも雪の深さを尋ねけり
正岡子規
- B をりとりてはらりとおもきすすきかな
飯田蛇笏
- C 残雪やごうごうと吹く松の風
村上鬼城
- D 蒲公英のかたさや海の日も一輪
中村草田男
- E こがね虫なげうつ闇の深さかな
高浜虚子

問一 A、Eの俳句の季語と季節を、それぞれ季語・季節の順に書け。

- A
- B
- C
- D
- E

問二 A、Cの俳句から切れ字をそれぞれ書き抜け。

- A
- B
- C

問三 A、Eの俳句から体言止めになっているものを二つ選び、それぞれ記号で答えよ。

問四 A、Eの俳句から字余りのものを一つ選び、記号で答えよ。

問五 Bの俳句は、ひらがなだけで書かれているが、それによってどのような感じがするか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- A 生き生きとして軽快な感じ。
- イ ゆったりとして重々しい感じ。
- ウ しなやかでやわらかい感じ。
- エ 美しくはなやかな感じ。

問六 Eの俳句の感動の中心はどんなことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- A こがね虫をつかまえることができた喜び。
- イ こがね虫を投げつけた爽快感。
- ウ 闇の中に投げ出されたこがね虫の不気味さ。
- エ こがね虫が吸い込まれた闇の深さ。

4 次の俳句を読んで、あとの問いに答えよ。

- A 頂上や殊に野菊の吹かれ居り
原石鼎
- B 町空のつばくらめのみ新しや
中村草田男
- C つきぬけて天上の紺曼珠沙華
山口誓子
- D 水仙や古鏡のごとく花をかかく
松本たかし

村上鬼城

E 五月雨や起きあがりたる根なし草

*1 つばくらめ || つばめ。
*2 曼珠沙華 || 彼岸花。

問一 Aの俳句から切れ字を書き抜け。

問二 A、Eの俳句から夏の俳句を一つ選び、記号で答えよ。また、その俳句の季語を書き抜け。

- 俳句
- 季語

問三 A、Eの俳句から冬の俳句を一つ選び、記号で答えよ。また、その俳句の季語を書き抜け。

- 俳句
- 季語

問四 A、Eの俳句から字余りのものを一つ選び、記号で答えよ。

問五 A、Eの俳句から、次の鑑賞文にあてはまるものを一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

- (1) 古めいた、なつかしい風景の中に季節の使者を発見した新鮮な感動を詠んでいる。
- (2) 色彩の対比が鮮やかで、花のすくっと立っている情景が強く印象づけられる。
- (3) 花の比喻表現から、花卉の清らかな美しさや、飾られている様子まで連想される。



22



詩・短歌・俳句 1

1 次の詩と解説文を読んで、あとの問いに答えよ。

あ あ ①あ あ 黒田三郎

あ あ あんなんにも他愛なく

僕自身によってさえやすやすと

欺されてしまったのに

僕には

僕を欺すことさえ出来ない

なんて

眩いたとたんに帽子が風にとんで行った

微笑

冷たい夕暮の風が

僕の唇から微笑を盗みとる

木の葉がざわざわ鳴っている

この詩は、「」う僕と、「僕を欺すことさえ出来ない」僕とを
とらえています。そのとらえ方に、いかにも手を焼いているという感
じがあり、ユーモラスでもあります。

こういうことは誰でも思い当たることでしょう。いろいろな掟があ
り、人はとりわけ、良心の掟に縛られています。それが自分にとっ
て不都合ならば自分を欺くことぐらいたやすいのです。その一方で、
奇妙に物事のすじを通さなければと思うこともあって、そういう場合
は自分を欺くことができなくなるものです。そういうちぐはぐに、作
者は、あるおかしみさえ感じているようなふしがあります。自己批評

2 次の詩を読んで、あとの問いに答えよ。

樹木

草野心平

嫩葉は光りともつれあい。

くすぐりあい。

陽がかけると不思議がつてきき耳をたて。

そよ風がふけば。

枝枝は我慢が利かずざわめきたち。

毛根たちはポンプになり。

駆け足であがり。

枝枝にわかれ。

葉っぱは恥も外聞もなく裸になり。

限どりの顔で。

歓声をあげ。

*限どり 歌舞伎で、表情や役の特徴を強く表すために、顔を色どる
こと。

問一 この詩の季節はいつか。最も適当なものを次から選び、記号で
答えよ。

- ア 早春 イ 初夏

- ウ 晩秋 エ 真冬

問二 この詩に繰り返し用いられている表現技法を次から一つ選び、
記号で答えよ。

- ア 倒置 イ 対句

- ウ 擬人法 エ 体言止め

問三 11行目「歓声をあげ。」とあるが、歓声をあげたのは何か。詩の

*人が人間洞察になっていて、しかし、ひたいに青筋をたてていないとこ
ろが私は好きです。
(吉野弘「詩の楽しみ」)

*洞察 見抜くこと。見通すこと。

問一 線①「他愛なく」の意味として最も適当なものを次から選
び、記号で答えよ。

- ア 無邪気に イ 手ごたえなく

- ウ 元気なく エ 無心で

問二 にあてはまる最も適当な言葉を、詩の中から二十字で書
き抜け。

問三 線②「いかにも手を焼いている」とあるが、その気持ち
が最もよく表れている言葉を、詩の中から二字で書き抜け。

--	--

問四 線③「ひたいに青筋をたてていない」の意味として最も適
当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア ひどく神経質になっているわけではない。

- イ ひどく悲しんでいるわけではない。

- ウ それほどみえを張っているわけではない。

- エ それほど気分がめいているわけではない。

--	--

中から三字で書き抜け。

--	--	--

問四 この詩は、行の末尾がすべて「。」で結ばれているが、そのこと
によって、どのような効果が生まれているか。最も適当なものを
次から選び、記号で答えよ。

- ア 言葉の勢いが弱まり、周囲の静けさを感じさせる。

- イ 規則正しいリズムが生まれ、堅苦しさを感させる。

- ウ 余韻が生じ、樹木の生命力を感じさせる。

- エ 調子が徐々に強まり、自然の脅威を感じさせる。

問五 この詩を四つに分けるとすると、どのように区切るのがよいか。
最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 1 2 — 3 4 5 — 6 7 — 8 9 10 11

- イ 1 2 — 3 4 5 — 6 7 8 9 — 10 11

- ウ 1 2 3 — 4 5 — 6 7 8 — 9 10 11

- エ 1 2 3 — 4 5 6 — 7 8 9 — 10 11

--	--

問六 この詩について述べたものとして最も適当なものを次から選び、
記号で答えよ。

- ア 満ちあふれんばかりの樹木のエネルギーを生き生きと表現し
ている。

- イ 樹木のあわたましい活動を通して、季節の移り変わりの速さ
を表現している。

- ウ わかりやすい具体例を挙げながら、樹木の内部の複雑さを描
いている。

- エ 太陽や雨など、樹木の生命を支える大自然の恵みのすばらし
さをたたえている。

--	--

3

次の短歌を読んで、あとの問いに答えよ。

A 白鳥はかなしからずや空の青海のあをにも染まずただよふ
若山 牧水

B 夏のかぜ山よりきたり三百の牧の若馬耳ふかれけり
与謝野晶子

C 暑き日の午後のちまたは風たえて塔のごとくに公孫樹たちたり
佐藤佐太郎

D あたらしく冬きたりけり鞭のごと幹ひびき合ひ竹群はあり
宮 柁二

E 瓶にさす藤の花ぶさみじかければたたみの上にとどかざりけり
正岡 子規

F 夕やけ空焦げきはまれる下にして氷らんとする湖の静けさ
島木 赤彦

問一 A～Fの短歌について、次の(1)～(7)に答えよ。

(1) 色彩の対照が鮮やかな短歌を二つ選び、それぞれ記号で答えよ。

(2) Aの短歌が表現しているものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。
ア 自由 イ 孤独 ウ 優雅 エ 非情

(3) Cの短歌では、何を何にたとえているか。

を [] にたとえている。

(4) Dの短歌から、冬の厳しさを最も感じさせる句を書き抜け。

(5) 二句切れで、比喩表現が用いられている短歌はどれか。記号で答えよ。

(6) 広々とした自然の中での、さわやかな光景を詠んでいる短歌はどれか。記号で答えよ。

(7) 室内の情景を詠んだ短歌はどれか。記号で答えよ。

問二 次はFの短歌の鑑賞文である。これを読んで、あとの(1)・(2)に答えよ。
あかあかと輝く夕やけの空とつめた静まりかえって動かぬ湖の [1] が大変に印象的な歌です。 [2] という言葉からは、この地におとずれた季節の厳しさと見る者の心をひきしめるような緊迫感が感じられます。

(1) [1] にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。
ア 対照 イ 相似 ウ 並立 エ 比較

(2) [2] には、この短歌の初句から結句までの中の一つの句がそのまま入る。最も適当な句を書き抜け。

[]

4

次の俳句を読んで、あとの問いに答えよ。

A 囀をこぼさじと抱く大樹かな
星野立子

B 花しだれ滝の音なきごとくあり
宮津昭彦

C 本読めば本の中より虫の声
富安風生

問一 A～Cの俳句の季語と季節は何か。

A	季語	季節
B	季語	季節
C	季語	季節

問二 Aの俳句から感じられることについて述べたものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

A 親子の愛情を優しく見守る大樹の姿から、ほのほとした感じが伝わってくる。

I 万物の生命の尊さを訴える大樹の姿から、しみじみとした感じが伝わってくる。

ウ すっかり葉が散り、落ち着いた大樹の姿から、なごやかな感じが伝わってくる。

エ 小鳥たちを迎えてうれしそうな大樹の姿から、温かい感じが伝わってくる。

問三 Bの俳句について説明した次の文について、[a] にあてはまる言葉として最も適当なものをあとから選んで記号で答え、[b] にあてはまる言葉を俳句の中から書き抜け。

[]

Bの句は表現技法として [a] を用いており、枝垂桜を [b] にたとえている。

ア 擬人法 イ 直喩 ウ 隠喩

[a] [b]

問四 Cの俳句のおもしろさはどこにあるか。

[]

5

次の俳句とその鑑賞文を読んで、あとの問いに答えよ。

風強ききりりと晴れて雪の山
阿部みどり女

雪の山がくつきりと力づよく、美しく浮き立っている作品。「きりりと晴れて」という表現は [A] 特有の空の鋼のような強さと青さを読む者に感じさせる。まして「風強く」という表現と考えあわせて読むといかにも「雪の山」が [B] 見えてくる。

(今瀬剛一編『秀句三五〇選7 雪』)

問一 [A] にあてはまる季節名は何か。漢字一字で書け。

[]

問二 [B] にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

A はかなく弱々しげに
I ふんわりと暖かく
ウ おぼろげにぼんやり
エ 明確にきわだって

[]